研究者と歌人というふたつの草鞋
一方から解放され涼しい風が吹く
狭い世界の評価など小さい小さい

一歩先のあなたへ

永田 和宏

18 風通しのいい窓辺へ

青 空

私は歌人と紹介されることもあれば、細胞生物学者、あるいは大学教授と紹介されることもある。講演の前など、枕詞のように「文学とサイエンスの両方をやっておられまして」と紹介されることが多くなった。いわゆる二足の草鞋ということになる。素晴らしいですね、と挨拶をされることが多いが、実はそのたびに身の縮むような思いをしてきたのが、私のこれまでの人生、その四〇年なのであった。

わが国には〈この道ひと筋の美学〉という伝統が否応なくある。一つのことにうち込んでいる姿こそが美しく尊いのだという意識が誰にも強い。逆に二つの世界に足を掛けているのは、どっちつかずのちゃらんぽらん、いい加減だと思われがちだ。

この道ひと筋の讃美は世の中の風潮だが、問題はそのような感じ方が、他ならぬ私自身のなかに抜きがたく残っていることなのであった。

研究者というのは、制限時間無しの職種である。どこまでが研究の時間で、どこからがそれ以外の私的な時間という区別がきわめてむずかしい。おまけにまわりには、国内にも国外にも優秀な人材ばかり。そんな職にありながら、一方で歌人としての仕事を同じウエイトでやり続ける。それはどこかで自分をごまかしているのではないか。その振り払いがたい〈うしろめたさ〉が常に私を苦しめて来た。人に後ろ指をさされたくない、その一念で、人よりは多く仕事をする。そのことを何より厳しく自分に課してきたと思う。

人様の前で両方やっていますなんとか言えるようになったのは、この十年ほど。五〇歳半ばを過ぎてからのことであった。

しかし、さすがにこれだけ長く二つのことをやってくると、それなりに良かったと思えることもある。その一つは、〈自分の居られる場はここだけ〉なのだという閉塞感からの自由である。小さな一つの世界だけに閉じこめられる、風通しの悪さからの解放ということである。

会社でも学校でも、所詮は自分のいる場所は狭い空間である。その狭い場所に同僚や先輩・上司が居て、ときに評価をされたり、ひどく叱責されたりもする。あるいは仲間から疎んじられたりもする。自分への悪い評価は、全否定の観を呈することが多く、人格のすべてを否定されたようで、ひどく落ち込む。

この場所だけしか知らない人間にとっては、ここだけが生きる場。否定されたらほかに逃げ場はない。友人関係では、せいぜい数人の仲間との友達づきあいが世界のすべてであるかのように勘違いしてしまうと、その中の人間関係、その仲間の評価だけが〈絶対〉となってしまってこれまた逃げ場がない。子供の自殺の大きな原因がここにある。

そんなことはないのだよ、すぐ横には別の世界があって、別の涼しい風が吹いているということを、どのように伝えることができるか。

この場所に君がいるのは、いくつもある可能性のなかの、たまたま選ばれた一つに過ぎないのだと思えること。会社でも学校でも、ここだけが自分の居られる場なのだと思っていては窒息してしまうだろう。

研究者と歌人というふたつの草鞋をはき続けて来て、私はこの風通しの良さということを強く感じ、そして気に入っている。時に歌人の側の永田和宏が研究者の永田を眺める。研究者の永田が、歌人の永田に問いかけることもある。そんな二つの世界の〈私〉が、互いに照らし合う関係、相対化しあう関係というのは、すこぶる風通しがいいのである。小さな評価にがんじがらめになって落ちこんでいるとき、もう一つの〈私〉が、そんなの小さい小さい、と囁いてくれる。その囁きは、ときに八方塞がりだと落ち込んでいる私に、ほのかな光とかすかな風を感じさせてくれるのである。

京都産業大教授（細胞生物学）、歌人

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます